



農業と福祉の問題を軽減する シアワセな連携

農業は、就農人口の減少や耕作放棄地の増加などの問題を抱えています。その一方で、障害者が土に触れて作物が育つ過程を体感すると、さまざまな良い効果を得られることが知られていました。そこで農業と福祉が連携して、障害者の働く場や居場所を作ろうという農福連携の動きが近年活発になっていきます。農業に取り組み福祉施設は増加しており、2012年度には全体の3分の1の施設が農業を行っています。連携の方法はさまざまですが、その多くは農家が障害者福祉施設に農作業を委託するもの。これは施設の職員が農家に代わって障害者に適切な作業を指示し、労働報酬を得るという形です。ほかに、農家との連携を機に自ら本格的に農業に参入した福祉施設もあれば、逆に新規就農した農家が、地縁がないため人手を確保できずに福祉施設と連携することも。複数の施設と作業契約を結び、非常に優れた農産品を作ることに成功している例もあります。

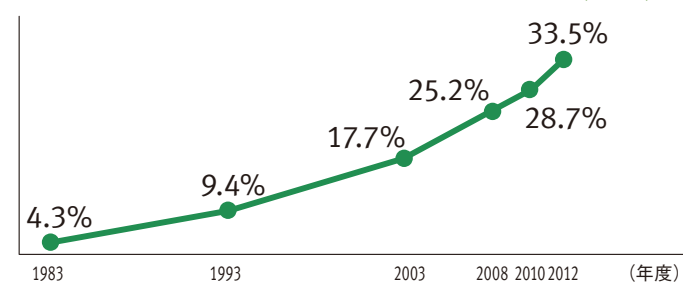
**両者のニーズを把握する
コーディネーターの重要性**

しかしこうした連携が、出会いに恵まれて自然に行われることはまれです。農業サイドには、障害者に対する理解が十分ではない場合が多く、福祉

サイドには人手を欲しがっている農家の情報がなかなか入ってきません。そこで必要になるのが、両者を取り持つ「マッチング支援」です。鍵となるのは、農業と福祉の両方に通じたコーディネーターの存在。両者のニーズを的確に読み取って懸念事項を解決し、障害者の特性を踏まえて農作業を切り分け、適切なマッチングを行う役割を担います。

農業と福祉の良好な関係が築かれれば、地域の活性化にも大いにつながります。両者の良好な関係作りのため、農業の作業補助や就労作業監督の役割を担う農業サポーターなどを置いている自治体もあり、こうした支援が徐々に広がりを見せています。

障害者福祉施設における農業活動の実施割合（累計）



出典：NPO 法人日本セルフセンター
「農と福祉の連携についての調査研究報告」（2014）から作成

農福連携

～支え合い、ともに進む～

農業と福祉。かけ離れているように見える
二つの分野で、win-winの関係が
構築される事例が増えています。

取材・文／柳澤美帆

農業分野と障害福祉分野との連携

障害者福祉施設



メリット

- ・農業は障害の特性に応じた作業が可能
- ・自然に触れることで情緒が安定し、リハビリ効果につながる
- ・一般就労に向け、体力や精神面が鍛えられる

労働力を提供

農作業を委託

就労継続支援事業所について

企業への就職が難しい障害者に就労機会を提供し、必要な技能訓練などを行う事業所。雇用契約を結んで最低賃金以上を支払う「A型」と、雇用契約を結ばないで受け入れる「B型」の2種類があります。

農家・農業法人など



メリット

- ・高齢化で農業従事者が減少する中で、補助労働力として障害者に期待
- ・障害者の雇用促進により、農業を通じて社会的要請に貢献

出典：厚生労働省、農林水産省「福祉分野に農作業を～支援制度などのご案内～」から作成

ノウフクDATA

有限会社ココ・ファーム・ワイナリー
(第5回「ディスカバー農山漁村の宝」選定地区)

栃木県足利市田島町611
TEL.0284-42-1194

事業：ワイン製造販売。ぶどう栽培やワイン造りの作業の一部を、障害者支援施設「こころみ学園」に委託



※「ディスカバー農山漁村の宝」選定地区とは、政府の有識者懇談会が選定している農山漁村活性化の優良事例 (P.20 参照)



朝から晩まで缶を叩いてぶどう畑に来る
カラスを追い払う。カラス番も大事な仕事



ワインボトルを運んだり、収穫したぶどうを潰したりなど、園生は醸造所の作業にも携わっている



ぶどうの収穫はスタッフと園生が総出で行い、急斜面のぶどう畑を1日に何度も上り下りする



右から、人気の「甲州F.O.S.」、
「こころみノートン」、「北ののぼろゼ」



こころみ学園の看板犬、
ピレネー犬のさくら。世話をするのは園生のタカセさんの担当

レストランでは25種類の
ワインが味わえる



爺湖サミットや2016年の主要7カ国（G7）外相会合などで各国首脳に振る舞われたほか、日本の航空会社の国際線ファーストクラスに採用されるなど、その品質は国内外で高く評価されています。

「園生たちはひとつのことを淡々とこなすのが得意なので、真夏の草刈りなど根気の必要な作業も手抜きをすることがありません。だから、うちの畑は除草剤を使ったことがないんですよ」と越知さん。大量のラベル貼りなども、知的障害を持つ人の特性である几帳面さが発揮され、ひとつひとつ丁寧に仕上げられます。

「障害を持つ人たちは、自分がしている作業が人の役に立っているというところに大きな喜びを感じています。彼らが力を発揮できる環境を整えられれば、農福連携はいいカタチで成り立つのではないですか」。

長年、園生と向き合ってきた越知さんはそう話してくれました。

各地の取り組み事例に見る 農福連携のカタチ

各地で起こっている農福連携の取り組み。ここではその先進事例を取り上げ、どのように障害者の力を生かしているのか、それぞれのカタチをご紹介します。



毎年11月に開催される収穫祭。2018年の収穫祭には2日間で1万人以上が集まった

ケース1

障害者が日々手入れするぶどう畑から
世界に認められるワインが生まれる

ココ・ファーム・ワイナリー

撮影／かくたみほ



ぶどうの房に傘をかける作業。
20万枚を1カ月でかけ終える

知的障害を持つ生徒のために
ぶどうを植えたのが始まり

栃木県の足利市駅から車で20分ほど、山間に畑が点在するエリアにココ・ファーム・ワイナリーがあります。急斜面に広がるぶどう畑の向かいにはレストランとショップがあり、料理やワインを求めて、平日でも客足が途絶えることはありません。

農福連携の先駆けといわれるココ・ファーム・ワイナリーは、知的障害者支援施設「こころみ学園」が、園生の働く場として1980年に設立しました。ぶどう栽培やワイン造りの作業の一部などを学園に委託しています。

「今から60年前、中学の特別支援学級の担任だった父がこの土地を購入し、障害を持つ生徒たちがずっと働ける場所を作るために、開墾してぶどうを植えたのが始まりです」と話すのは、学園施設長の越知眞智子（おちまこと）さん。ワイナリーと同じ敷地内にある学園には、18歳から96歳までの知的障害を持つ100名弱の園生が暮らし、ぶどう畑の手入れやいたけの原木栽培など、個々の特徴や能力にあった作業を担っています。

園生たちの地道な作業が
おいしいワイン造りを支える

現在は年間20万本、約30種類のワインを製造。2008年の北海道洞



「福祉だとは思っていない。皆で生きていくために当たり前のことをしているだけ」と話す越知さん

障害者と農家をつなぐ (JA 松本ハイランド)

農家が慢性的に抱えている人手不足の解消と、雇用契約に基づく就労が難しい方が通所する就労継続支援B型事業所所属の方たちの所得向上を目指し、2017年より無料職業紹介事業に基づくマッチングを行っているJA松本ハイランド。

「B型就労の方の月平均工賃は15,295円で、時給換算では199円しかありません。この方々の所得向上と、スポット的に人手不足となる農家の需要を合致させるために始めました」と語る同JAの鎌伸吾さん。「青年部の事務局をやっている、もともと農家さんとコミュニケーションが取れていたことと、長野県セルフセンター協議会の協力もあり、スムーズに立ち上げることができました」。



事業所向けトマト収穫作業の事前説明会

今年度上半期は210件のマッチングができ、トマトの収穫や長いも棚の片付けなど、着実に作業需要が広がる一方、福祉事務所にも農家の側にもまだためらいがあると言います。「できるものをできる範囲でやるのがいいと思います。高齢で廃業を考えている方が、障害者の方に手伝ってもらうことにより、1年でも2年でも長く続けられる。そうして次代につなげられるといいなと思います。押し付けるものではありませんから」。



ぶどうの枝の片付け作業の手順を農家が説明

外食産業などで需要が高い一方で手間のかかる小さな野菜。その収穫作業を障害者が担っている



アイガモ農法による「コシヒカリ」のほか、「姫ねぎ」、「姫みつば」、「ミニちんげん」などを生産

能力と給料のバランスが鍵。お互いに必要な存在として

「私たちが掲げるユニバーサル農業では、農業と福祉の融合を目指しています。農業が福祉を支援するのではなく、お互いが協力し合う中で、売上や目標などの成果を見える化し、障害者の雇用が農業を強くすることを数字で示したいと思っています。そして個々の能力に見合う給料を払えるようにしたいのです」と鈴木さん。それには農業経営の在り方をしっかりと見詰め、生産工程における役割分担を明確にすることが大切だと言います。「例えば『トレイを綺麗にしておいて』といった抽象的な指示ではうまくいきません。作業工程を分解し、具体的に指示することで精度が均一になり、生産性も上がりました」。



園主の鈴木さん

野菜に付く虫を吸い込む「虫トレーラー」。障害がある人のゆっくり進むペースが虫を捕まえるのに適している

働きたいという想いに応え 農作業体験から始めて

「受け入れたきっかけは、求人をご覧になった障害者を持つ子とお母さんが来園され、『給料はいらないから働かせてほしい』と懇願されたことでした。障害者雇用の現実を知り、何か役に立てるのではない、まずは農作業体験として受け入れました」と語る園主の鈴木厚志さん。

まずは障害者就業・生活支援センターに登録してもらい、個々の作業能力を共有することから開始。受け入れてみると従業員が自然と支援する中で、職場が明るくなったと言います。「毎年雇用を増やし、現在は25名が就労しています」。



「ばあばのお昼ごはん」で働く利用者の本間さん。人懐っこい笑顔を見せるも、以前は人との関わりが苦手だったとか



九神ファームの利用者で運営している食堂「ばあばのお昼ごはん」でも障害者がいきいきと働いている

人との関わり方に変化が 将来は好きなことを仕事に

貫田さんによると、施設を卒業し一般就労に至った人は7名。3名が就労先で利用者からスタッフにステップアップし、他の4名はスーパーの総菜部で弁当の盛り付け、食品工場での作業、一般事務などさまざま。一般就労に至った一人に話を伺うと、「入社前は人との関わりが苦手だったのですが、入社してから経験を積んだことで、人との関わりやすくなりました。自分のことを優先する前に、人の役に立つことをしてから自分のことを考えるのが大事だと思います。今後はさらにステップアップを目指して、家具の製造など自分が好きなことを仕事にしたい」と答えてくれました。



大根の収穫を喜ぶ従業員の皆さん。他にもじゃがいも、かぼちゃ、大豆などを育てている



嵐山工場内でじゃがいもの皮むきなどの加工を行う。1日に600kgのじゃがいもを加工することも

芽室町を福祉の町にしたい 食品加工で安定雇用を確保

宮西元町長が「誰もが当たり前に安心して働いていける町づくり」構想を掲げた芽室町。その想いに応え、障害者雇用実績のある総菜店チェーン「タック・チャム」が出資して、町内初の就労継続支援A型事業所として設立されました。「主要事業は農作物の生産販売と食品加工の二本立てです。雇用契約を結んでいる障害者たちには、社会で働いていける力を養えるように、先輩の利用者が後輩の利用者の面倒を見ながら、自分でできることは自分でするよう指導しています」と語るのは、サービス管理責任者の貫田尚洋さん。

ケース2

ユニバーサル農業として
農業と福祉の融合を目指す

きょうまるえん
京丸園



ノウハウDATA

京丸園株式会社

静岡県浜松市南区鶴見町 380-1
TEL. 053-425-4786

事業：芽ねぎ、ちんげんさい、みつばなどを栽培する農業法人



ケース3

経験が人を変えてゆく。
好きなことを仕事にしたい

きゅうじん
**九神ファーム
めむろ**



ノウハウDATA

株式会社九神ファームめむろ

(第3回「ディスカバー農山漁村の宝」選定地区)

北海道河西郡芽室町中美生 2 線 47-1
TEL. 0155-65-2280

事業：農作物の生産・販売、食品加工、お弁当の製造・販売、観光業

